

2015 年度 社大海外ソーシャルワーク研修報告

スリランカの社会福祉： ソーシャルワークにおける貧困と仏教に関する諸課題

学部・院教授 藤岡孝志・研究所研究員 ヴィラーグ VIRÁG ヴィクトル Viktor
院前期1年 三田侑希・学部2016年卒 越智大河
学部4年 太田風果・学部4年 宗像慶子
学部3年 賀陽聞思・学部3年 宮下 朗

はじめに

概要

この海外研修では、スリランカを目的地に選び、社会福祉について調べることを目的とした。特にソーシャルワークにおける貧困と仏教をテーマに、複数の高等教育機関、宗教施設、公的セクターと民間セクターの社会福祉サービス提供機関を視察した。宗教に関しては、仏教を主軸とし、ヒンドゥー教と回教、またこれらとソーシャルワークの関係を調べた。児童福祉や高齢者福祉のような従来の専門領域に加え、コミュニティワークを基盤とする環境保全プロジェクトの一環として展開されているグリーン・ソーシャルワーク（green social work）について理解を深める研修内容もプログラムに含まれた。

研修期間 2016年3月20日～27日(8日間)

訪問地域 スリランカ（コロンボ、キャンディ、チラウ）

参加人数 8名（引率者を含む）

キーワード 貧困、仏教、グリーン・ソーシャルワーク

研修プログラム

基礎的なオリエンテーションと計2回の出発前学習会を経て、以下のスケジュールに沿ってスリランカを訪ねた。現地で得た知見を整理し、最大限に活かすために、5月より更なるオリエンテーションと帰国後学習会に取り組んできた。

2月～3月		・総合オリエンテーション ・事前学習会（2回）
3月20日 (日)	午前	・東京発
	午後	・コロンボ着
3月21日 (月)	午前	・社会開発学院 (仏教ソーシャルワーク学習)
	午後	・社会開発学院（貧困学習）
	夕方	・歴史学習（博物館）
3月22日 (火)	午前	・児童福祉現場（民間）
	午後	・高齢者福祉現場（公的）
	夕方	・宗教学習（仏教寺院）
3月23日 (水)	午前	・児童福祉現場（公的）
	午後	・高齢者福祉現場（民間）
	夕方	・文化学習（民俗村） ・宗教学習（ヒンドゥー教寺院）
3月24日 (木)	午前	・キャンディへ移動
	午後	・ペラデニヤ大学（社会学科） ・スリランカ国際仏教学院
	夕方	・宗教学習（仏歯寺）
3月25日 (金)	午前	・環境学習（植物園）
	午後	・文化学習（伝統産業）
	夕方	・仏教ソーシャルワーク学習 (講義と議論)

3月26日 (土)	朝	・チラウへ移動
	午前	・仏教ソーシャルワーク現場 (仏教寺院)
	午後	・グリーン・ソーシャルワーク 現場(環境保全とコミュニ ティワーク)
	夕方	・コロンボ発
3月27日 (日)	午前	・東京着
5月～		・帰国後オリエンテーション ・帰国後学習会

方法

本稿の内容は示している参考文献の他に、視察先等における聴き取りデータに基づいている。

結果及び考察

基礎知識と福祉関連統計の国際比較

スリランカ現代社会に関する基礎的なデータを把握し、文脈の中で可視化するために、下記の表を作成した。本表から、スリランカの社会実態、経済状況、生活水準、人口構成について日本に照らし合わせて明らかになった。

	スリランカ	日本
面積 (km ²)	65,610 257 中 122 位	377,915 257 中 62 位
人口 (人)	22,053,488 238 中 57 位 (都市 18.4%)	126,919,659 238 中 11 位 (都市 93.5%)
人口密度 (人 / km ²)	323 244 中 40 位	337.1 244 中 36 位
民族	シンハラ人 74.9% スリランカ系タミル人 11.2% ムーア人 9.2% インド系タミル人 4.2% その他 0.5% (マレー人、バーガー人など)	日本人 98.5% ※ その他は全て 1% 以下
宗教	仏教 70.2% (公式) ヒンドゥー教 12.6% 回教 9.7% カトリック 6.1% その他キリスト教 1.3% その他 0.05%	神道 79.2% 仏教 66.8% キリスト教 1.5% その他 7.1% (合計は 100% 以上)
言語	シンハラ語 74% (公用語) タミル語 18% (公用語) その他 8% (英語 10% : 共通語)	日本語

民族的配置	宗教的配置	言語及び宗教的配置
通貨	ルピー (Rp、LKR)	円 (¥、JPY)
インフレ	3.3% 225 中 137 位	2.7% 225 中 118 位
GDP (順位のみ)	230 中 63 位	230 中 5 位
GDP 成長率	7.4% 224 中 15 位	-0.1% 224 中 200 位
失業率	4.3% 207 中 41 位	3.6% 207 中 31 位
税等収入 (GDP 比)	12.3% 216 中 204 位	32.9% 216 中 74 位
財政赤字 (GDP 比)	-6% 218 中 186 位	-7.1% 218 中 194 位
財政債務 (GDP 比)	71.81% 174 中 37 位	231.9% 174 中 1 位
1 人あたり GDP (米ドル)	10,400 230 中 134 位	37,500 230 中 44 位
貧困線以下人口 (相対的)	8.9%	16.1%
ジニ係数 (世帯所得分布)	49 144 中 23 位	37.9 144 中 73 位
医療費 (GDP 比)	3.2% 191 中 177 位	10.3% 191 中 22 位
乳児死亡率 (死亡 / 千人)	8.8 224 中 146 位	2.08 224 中 222 位
教育費 (GDP 比)	1.7% 173 中 168 位	3.8% 173 中 115 位
平均在学年数	14	15
識字率	92.6%	NA
人間開発指数	0.757 188 中 73 位 区分：高い	0.891 188 中 10 位 区分：とても高い
合計特殊出生率 (人)	2.1 224 中 106 位	1.4 224 中 211 位
人口増加率	0.84% 233 中 131 位	-0.16% 233 中 212 位
平均寿命 (歳)	76.56 224 中 84 位	84.74 224 中 2 位
年齢構成	65 歳以上 9.04% (10 人に 1 人) 14 歳以下 24.58% (4 人に 1 人) 	65 歳以上 26.59% (4 人に 1 人) 14 歳以下 13.11% (7 人に 1 人) 

※ CIA (2016) を基に作成。

近現代史

現在のスリランカは、元々セイロン島という名称で、1505年からポルトガル、1658年からオランダによる支配を経て、1815年にイギリスの植民地となった。1948年に英連邦自治領セイロンとして独立し、1972年にスリランカ共和国が誕生し、1978年に正式名称が民主社会主義共和国に変わった。同時に、北部の独立を目指すタミル系過激組織の活動を含む民族運動が始まった。タミル人は主にイギリス時代にプランテーションの労働力としてインド南部から連行された民族で、新国家形成後に進められたシンハラ系マジョリティを言語などの面で優遇する政策の下で相当な不利益を被った。対立は紛争に、そして1983年から全面的な内戦に拡大し、2009年の正式な集結宣言まで、四半世紀以上に渡って続いた。そのため、シンハラとタミルの両民族の間の和解を促す取り組みは未だに求められている。

社会福祉とソーシャルワークの特徴

公的制度

スリランカ政府による社会福祉政策の最大の特徴は、イギリス時代から独立後も引き継いでいる無償の公的教育及び医療サービスである。前者は、9年間の義務教育を越えて、大学まで学費が無料となっており、教育機関の95%は公立である。後者について、医療保健機関の60%は公的セクターに当たり、対人医療サービスが無料で、医薬品のみ有料となっている。

社会保険制度として、ETF (Employees' Trust Found) 被雇用者信託基金、EPF (Employees' Provident Fund) 被雇用者準備が整備されている。前者は、雇用保険に相当するものであり、全ての労働者が加入する保険となっている。被用者の負担金はなく、雇用者側は被用者報酬の3%を基金に拠出する仕組みとなっている。後者は、年金保険に相当するものであり、積立式となっている。被用者年収の8%、雇用者はその12%をそれぞれ

基金に拠出する仕組みとなっており、退職時にその積立金全額の取得権が得られるようになっている。

また、公的扶助として、サムルディプログラムと呼ばれる生活保護・給付金制度が整備されている。これは1995年から開始した事業であり、主に生活費の補助や貯蓄サービスが行われている。このプログラムの実施主体は、県や郡単位で設置されている事務所であり、制度の対象となる困窮者世帯には、それぞれの経済状況や家族構成に応じて、毎月給付金の支給を行っている。

仏教とソーシャルワーク

仏教には人は生きている限り常に苦しみを抱えるという考え方がある。そして、それに基づき、功德・善行を重ねることでその苦しみから解き放たれるという考え方である。苦しみの主な理由は人間が必要以上に欲をかくことにあるという。余計な欲をかくことで、手に入らなかった時の苦しみを増やしてしまっているということである。

スリランカは、上座部仏教であり、出家し、僧侶を目指す人々は俗世間を断ち切り修行を行う。家柄や血筋に関係なく誰でも僧侶を目指すことができるが生活は制約も多く、婚姻関係を持つことができない。そのため、僧侶の数が多く、社会的な信頼度も高い。地域住民は、通常的生活の中で功德を積む生活を行っている。功德を積むことにより、カルマ(=業)を改善することにより来世で幸福になれると考えているためである。僧侶は厳しい修行をし、地域住民からは尊敬される存在であるため、道路では優先されるし、挨拶は頭を床につけて行うのが常識となっている。満月の日(ポヤ・デイ)は仏教にとって特別な日であり、仏教徒は各寺院へ向かい花をお供えする。また、どんなに貧しくても寺への寄付や僧侶へのおもてなしは精一杯行う。また、上座部仏教の教えに基づき、狭義の宗教活動の他に、社会奉仕活動にも積極的に従事しており、実際にソーシャルワーク機能を果たしている。この状況は国全体にとって重要な社会資源となっている。しかし、専門的な

ソーシャルワークと仏教的なソーシャルワークは前提となる思想的背景と、考え方及び理論的背景が実質的に異なり、その比較検討が興味深い。

貧困とソーシャルワーク

スリランカは、無償の教育及び医療制度も影響しており、周辺にある他の南アジア諸国と比べ、平均的な生活水準が高い。貧困軽減策を含む国連指定のミレニアム開発目標（MDGs）の進捗状況も順調である。また、貧困レベルの測定において、日本と異なり、従来の相対的貧困率を越えて、例えば人間開発指数（HDI）のように、単なる所得以外の要素にも配慮した多次元的なモデルもよく使用されている。スリランカの貧困の背景にある独特な社会現象として、政権交代に伴う政策の頻繁な変化、カースト制等による社会的排除及び周縁化、そして長く続いた内戦を原因とする各種給付を期待する一部の国民がもつ依存意識が挙げられる。

社会福祉現場とソーシャルワーク実践

視察した従来の実践機関は、児童福祉と高齢者福祉の分野を含み、それぞれ公的機関と民間機関を対象とした。これらに加え、仏教ソーシャルワークとグリーン・ソーシャルワークの現場を調べた。

児童福祉現場

訪問した国立児童保護局（NCPA）は、1998年に設立された機関である。それまでは、スリランカでは児童虐待はないと考えられていたが、1985年に二人の被虐待児を発見しスリランカ大統領に政策提言を行い設立に至った。ホットラインの設置などを通じて、観光業における強制児童買春を含む児童虐待及び児童労働対策に取り組んでいる。児童労働に関してはILOの条約に則っている。現在は2004年に発生した津波での震災孤児や26年に及ぶ内戦での孤児についても対象となっている。1991年に子どもの権利条約に批准している。また、視察先の民間機関は、SOS

子どもの村であった。ここでは、戦後オーストリアから始まった国際NGOの理念の下で、家庭的な環境整備を最大限に重視した児童養護実践を展開している。

スリランカにおけるSOS子どもの村は、スリランカの法律では禁止されている男女を同じ施設で養育するやり方をとるなど、スリランカの一般的な児童養護施設とは一線を画した方法で運営されている。また、子どもたちが家庭で持っていた宗教を尊重し、宗教ごとに施設を分けて養育するなど、スリランカらしい子どもの人権への配慮も見られた。子どもの村で働く職員は子ども10名に対し1名、マザーと呼ばれる女性職員が配置される。年長の子どものマザーを助け、幼い子どもの世話をするなど、さながら大家族のように施設が運営されているのが特徴的であった。

高齢者福祉現場

訪問先の国立高齢者ホームは、家族に扶養放棄されたなど、行き場のない高齢者の入所施設である。このホームには、身寄りのない高齢者約200人が、裁判所の許可を得て、措置で入所している。ケアにあたる職員数は15人程と大変少なく、入所者に対しては必要最低限の生活・衛生面の保障が行われている。また、入所者の中には、精神疾患を抱えている人が多く、その数は認知症よりも多いという特徴がある。現状としては、身寄りのない高齢精神障害者の受け入れ先ともなっており、さらに、最低限の生活面の保障を担っている点も踏まえると、このホームは救護施設のような位置づけとなっている。

対照的に、イギリス発の国際NGOであるヘルプ・エージのスリランカ事務所では、入所以外のサービスに力を入れている。高齢化に関する国連五原則（思いやり、自立、参加、自己実現、尊厳）に基づき、家族（介護者）支援、健康診断、白内障をはじめとした眼医療、文化的に適切な伝統治療法にあたるアーユルヴェーダ医療、福祉用具の配布、ボランティア育成、配食サービス、高い年齢層を対象に津波被災地の住宅復興、デイ・ケ

ア、老人会、職業訓練などの所得創出プログラム、社会啓発や政治的ロビーを含む高齢者の当事者運動の組織化のように、幅広い活動を進めている。デイ・ケアは、常設の施設等で行うのではなく、地域の公民館や寺院の一部を間借りして実施されている。地域にある資源を活用し、地域に根差した支援が展開されている。また、宗教施設である寺院も地域の社会資源の一つとして位置づけられ、地域福祉の担い手となっている。

仏教ソーシャルワーク現場

以下の3事例について情報収集を行った。

ボディラジャ財団では、従来の宗教活動に加え、教育部門では子どもの国際教育を含むプレスクールと幼稚園、英語教育、2004年の津波で被災した子どもの発達センターを運営している。職業訓練部門では職業訓練省と共同で各種技能及びIT教育に取り組んでいる。福祉部門は、女性ホーム、子どもホーム、被災地復興、水道整備のような事業をまとめている。医療部門では、母子保健サービスの他に、献血や臓器移植のために眼球提供のコーディネート活動を展開している。

国立社会開発学院の教員も務めているある僧侶による取り組みでは、仏教的なソーシャルワーク実践を通じた内戦後の民族間和解を目指した。2001年と2003年の間に多民族・多宗教の子どもコミュニティの形成に取り組んだ。合計264人の子どもを対象に、平和で調和がとれた関係構築に成功した。

最終日に訪問した農村部の仏教寺院では、日頃から周囲の農民を対象に様々な社会福祉及び教育活動に従事している。これらは、所得創出、疾病予防、ボランティア育成、各種学校、井戸整備などを含む。今後、このような社会活動において求められる専門性を高めるために、現地の伝統的な知識体系に基づく仏教系のソーシャルワーク学校の設置を進めている。

グリーン・ソーシャルワーク現場

グリーン・ソーシャルワークは、コミュニティ

や地域レベルのイニシアティブを中心に、世界の南北格差と複雑に関係している人災を含む自然環境的な課題に取り組むソーシャルワークである。学術的に定義しているドミネリー（2012）によれば、グリーン・ソーシャルワークは人々の相互依存関係、人々と物理的な居住環境の一部である植物界及び動物界との関係の社会におけるあり方、社会経済的及び物理的な環境危機の相互作用、ならびに人々及び地球のウェルビーイングに害を及ぼす対人行動に焦点をおいている。これらの課題の解決に向けて、人々が生きる社会の基盤、人間同士と他の生き物や物質的な世界との関係の捉え方を抜本的に見直すことを提起している。そのために、人々と地球全体を搾取している生産及び消費様式の指摘、権力と資源の不公平は配分を含めて構造的な不平等への対処、貧困と不平等をもたらす各種差別主義の撤廃、グローバルな相互依存関係、連帯、平等な社会関係の促進、限定された特権層のみではなく、全ての人々のために土地、空気、水源、燃料源、鉱物などのような有限の自然資源の活用、また地球上の植物と動物の保護に従事する。最終的に、困窮しており、周縁化された人々の生活の質に悪影響を及ぼす社会政治及び経済的な働き改善に向けた取り組み、現在及び将来において人々と地球のウェルビーイングの向上に必要な政治的及び社会的変化の実現、そして他人に構う（気を使う）義務と他人に構って（気を使って）もらう権利の促進を目指している。

視察した漁民組合は、マングローブ保全とその前提となるコミュニティ開発に取り組んでいる。マングローブは二酸化炭素の吸収によって温暖化対策において重要な役割を果たすのみでなく、自然の堤防として津波や台風から守る防災機能もある。本組合では、国連の持続可能な開発目標（SDGs）を念頭に、関係省庁と国際NGOと協働してスリランカ国内において47カ所でマングローブの栽植を行っている。1980年代以降、経済・産業活動が原因で減少したマングローブを復活させる活動は、地域住民にとって持続可能な雇用の機会となり、生活状況の改善に繋がるまた、

「コミュニティを守れば、コミュニティがマングローヴを守ってくれる」という理念の下で、コミュニティワークも展開している。その内容は、女性及び若者向けのマイクロファイナンスや職業訓練と手芸販売を通じた生活保障、医療保健サービス、家族計画等の教育プログラムなどから成り立っている。

社会福祉教育とソーシャルワーク人材育成

1952年に設立された国立社会開発学院(NISD)は社会的エンパワーメント及び社会福祉省の認可を受けた唯一の高等教育機関で、スリランカのソーシャルワーク専門職養成を担ってきた。国際専門団体(IASSW、IFSW、ICSD、APASWE)のカウンターパートの役割を果たしている。教育において、ソーシャルワークの学士号(BSW)と修士号(MSW)以外に、社会福祉関連の様々な専門士号と高度専門士号(ソーシャルワーク、女性エンパワーメント、カウンセリング、児童保護)の学位も出している。これらの中で、修士課程における教育は英語のみであるが、他のコースの大半はシンハラ語・タミル語・英語の3言語ポリシーを実施している。また、全国各地の地域センターを通じて、ソーシャルワークに理解のある人材を増やすために、多くの短期研修(心理社会的介入)も展開している。

更に、キャンディのペラデニヤ大学の社会学科では、これから新しいソーシャルワーク課程の創設を検討しており、特に仏教思想に基づいた養成

に取り組みたい。同じくキャンディで、スリランカ国際仏教学院(SIBA)において博士課程まで主に仏教学を教えているが、全てのコースにおいてソーシャルワークが必修科目となっている。それに加え、独立したコースにおいて、仏教臨床心理学の高度専門士と仏教カウンセリングの専門士も育てている。そして、アヌラダプラという地方都市では、僧侶向けのソーシャルワーク校が開校する予定である。

文化及び宗教学習

スリランカに対する理解を深めるために、研修内容に次のようなプログラムも含めた。植物園と自然マングローヴ園では環境学習に従事し、民俗村等では伝統的な生活様式について学んだ。また、スリランカの歴史に関する知識を深められよう、コロombo国立博物館を訪ねた。そして、スリランカの宗教に直接的に触れることを重視し、仏歯寺を含む複数の仏教及びヒンドゥー教寺院を視察した。

謝辞

本事業の実現に向けて助成金を提供して下さいました全国生活協同組合連合会、本学教育後援会、スリランカ現地でコーディネート及び協力して下さいました方々、そして日本国内で仕事をして下さいました学内外の方々、深く感謝の意を申し上げます。

参考文献

英文

CIA (2016) World Factbook, Central Intelligence Agency.

Dominelli, L. (2012) Green Social Work: From Environmental Crises to Environmental Justice. Polity.

HelpAge Sri Lanka (2016) HelpAge Sri Lanka, HelpAge Sri Lanka.

Herath, H. M. D. R. (2016) Social Work from a Buddhist Perspective, presented on March 25 at the Hotel Suisse in Kandy.

Jayaruban, V. (2016) Poverty and Social Work, presented on March 23 at the National Institute of Social Development in Colombo.

NISD (2015) BSW Student Handbook (2015-2016), National Institute of Social Development.

NISD (2016) National Institute of Social Development, presented on March 23 at the National Institute of Social Development in Colombo.

Padmasiri, R. (2016) Buddhism and Social Work in Sri Lanka, presented on March 23 at the National Institute of Social Development in Colombo.

Somananda, O. (2016) Role of Social Work in Building Ethnic Harmony Through Religious Practice, presented on March 23 at the National Institute of Social Development in Colombo.

和文

ACE JAPAN (2016) 「児童労働入門講座」 <http://acejapan.org/>.

外務省 (2009) 「スリランカ内戦の終結～シンハラ人とタミル人の和解に向けて」『わかる！国際情勢』外務省.

磯邊 厚子 (2013) 「スリランカの社会福祉の現状と課題～福祉政策の光と影～」『京都市立看護短期大学紀要』第 34 号, 23-33.

国際労働機関 (2016) <http://www.ilo.org/tokyo/lang--ja/index.htm>.

杉本 良男, 高桑 史子, 鈴木 晋介編 (2013) 『スリランカを知るための 58 章』明石書店.